第 3 回 ひきこもり支援協議会 議事録 (主要な質疑応答及び結果)

開 催 日 時	令和 3 年 1 2 月 1 7 日 (金曜日) 午後 6 時 0 0 分～午後 8 時 0 0 分
会 場	としま区民センター会議室 5 0 3
出 席 者	<p>【委 員】文京学院大学人間学部人間福祉学科 教授 中島 修、 東京学芸大学教育心理学講座 准教授 福井 里江、 NPO KHJ 全国ひきこもり家族会連合会 事務局長 上田 理香、 NPO ワーカーズコープ事業推進本部 事務局長 牧野 斉子、 櫻和メンタルクリニック 院長 山野 かおる、 池袋市民法律事務所 所長 釜井 英法、 高齢者総合相談センター(包括) ふくろうの杜センター長 深澤 雅世、 長崎第一地区 民生委員・児童委員 副会長 山本 ナミエ、 小杉 順二、小暮 和美、池袋保健所健康推進課 課長補佐 松川 君子、 豊島区民社会福祉協議会 地域相談支援課長 田中 慎吾、 東京都 福祉保健局生活福祉部地域福祉課生活支援担当課長 小澤 耕平 豊島区 保健福祉部長 田中 真理子</p> <p>【事務局】豊島区 自立促進担当課長 今村 宏美</p>
傍 聴 者	2 名
会 議 次 第	<p>開会</p> <p>○ 挨拶 (中島会長)</p> <p>議題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 前回の協議会について 【資料 3-2】 2 第 1 回ネットワーク会議の報告について 【資料 3-3】 3 令和 3 年度版 豊島区ひきこもり支援方針 (案) 【資料 3-4、3-5】 4 その他 <p>閉会</p>

資 料	<ul style="list-style-type: none"> ・ 次第・座席表 ・ 資料 3-1 委員名簿 ・ 資料 3-2 第 2 回ひきこもり支援協議会 議事録 ・ 資料 3-3 (報告) 第 1 回ひきこもり支援ネットワーク会議 ・ 資料 3-4 【概要版】令和 3 年度版 豊島区ひきこもり支援方針 ・ 資料 3-5 令和 3 年度版 豊島区ひきこもり支援方針
-----	--

主要な会議内容及び質疑応答について

開 会

○ 挨拶 中島会長

議 事

1 前回の協議会について 【資料 3-2】

- ・ 豊島区のひきこもり支援に係る課題についての議論

(事務局)

- ・ 前回は、オンライン会議形式で開催し、豊島区のひきこもり支援に係る課題についてご議論いただいた。
- ・ 豊島区と東京都のデータ比較を事務局から報告し、小澤委員からコメントにて「東京都ひきこもりに係る支援の充実に向けての提言」、上田委員より「KHJ 全国ひきこもり家族会連合会による調査結果」、福井副会長より「都市問題：これからのひきこもり支援のあり方」についてご説明いただいた。
- ・ 以上の視点も踏まえ、委員の皆様から情報発信、居場所、支援体制等のご意見をいただいた。

(会長)

- ・ ひきこもりを支援という観点だけではなく、本人が自発的に社会と繋がっていくことができるような取り組みが大事ということを共有できる良い会議となったと思う。

2 「豊島区ひきこもり支援ネットワーク会議について」【資料 3-3】

(事務局)

【資料 3-3】について説明

- ・ 民間の支援団体とのネットワークを構築し、団体の抱える課題を把握することを目的とし、第 1 回は、豊島区内で活動する 4 団体と「居場所」や「単身世帯の支援」について意見交換した。

[居場所について]

- ・ 「物理的な居場所と仮想的な居場所の両方があるといい」、「物理的な居場所の確保とその運営に係る経

費を検討してほしい」「若年層には仮想的な居場所が効果的である、一方で、セキュリティ面の課題がある」というご意見をいただいた。

[単身世帯の支援について]

- ・「生きがい」がない方が多い。「地域には人手が足りなくて困っている分野もあるため、地域の中で役割をもらい、地域で活動できるような仕組みができればいい。」といったご意見をいただいた。

[今後について]

- ・参加団体を広げ、様々なご意見をいただきたいと考えている。

(会長) 当日は出席されていた委員はいかがか。

(委員)

- ・本人と家族の目線にたった事業者が選ばれていることを喜ばしく感じている。
- ・資料にあるとおり、物理的、仮想的（バーチャル環境）と「居場所」の選択肢があることによって相談者は自分に合った居場所を見つけることができるのではないかとその意見に注目している。
- ・単身世帯の引きこもりについても、地方の親御さんからの安否確認の問い合わせが多いため、豊島区ではどのように取り組んでいくのかを見守っていきたい。

(委員)

- ・「居場所」という観点であれば、ひきこもり支援団体が新しくつくるだけでなく、既存の様々な場所を引きこもりの方を受け入れやすくなるような、ひきこもりの方が誰でも参加しやすくなるように変えていくという取り組みも必要であると感じた。
- ・Meta Anchor が仕事を通じたつながりづくりをされていると感じた。仕事だけではなく、普段メール等でやりとりをされている方が実際に会う機会をつくって、そこでつながってコミュニティができている。仮想的なつながりが物理的な居場所につながっていくという選択肢もあるかと感じた。

(会長) ご感想などいかがか。

(委員) 居場所づくりは大切だと思う。居場所があれば行こうかなという気持ちになれるので、居場所は必要だと考える。

(委員) 経験から言うと、「誰か見つけてくれないかなあ」ときっかけを待っている面があった。そういう団体が世の中にあるということを知ってもらい、また支援団体には地道に活動していただき、一人でも多くの人を救ってほしい。

(会長) 支援団体が「見える化」されて皆に知っていただくことはとても大事なことだと思うし、先ほど委員が言ったようにひきこもり支援をしている団体だけでなく、それに関連している様々な取り組みをしている団体にも理解してもらい、つながっていけることが大切だと思う。

(委員) 団体と団体がつながりあうような、お互い顔のわかる関係をつくっていけるということはとても大事なことなので、有意義な会議であったのではないかなと思う。「居場所」は、場所も大事だが、人も

大事だと思うので、安心できるような人がいる空間づくりができると良いと感じる。一方で、このような活動は予算がつきづらいという現状があり、居場所づくりの中で心を細やかに配りながら頑張っている、少額の謝金対応になってしまう。また、場所を借りる費用といった面でも安心して使用できる場所が少ないといったことも聞く。場所の確保やその運営に係る人権費に関して充実すると良いと思う。

(委員) 地方の親御さんからの安否確認の問い合わせは、大学生に関する相談が多い。

オンライン授業に対応できなくてこもり始めてしまう学生が増えている。あるいは対面に戻っていく中で従来どおりの大学の授業についていくことができず、ひきこもりがちになって、心配した親が相談してくるケースなど。豊島区は学校も多く、若い方も多いので一人暮らしも多い。今までは単身の高齢者の方が多い印象であった。

(委員) 先ほどの「誰か見つけてくれないかなあ」という言葉に胸を打たれた。以前、高齢の母親と二人で引っ越してきた方がいらした。その後ほどなくして母親が亡くなられたが、残された息子は引っ越してきたばかりということもあり人間関係ができておらず、何度も彼に声をかけたものの結局、助けることができなかった。今思えば、もっと様々な面からアプローチをするなど出来ることが他にあったのではないかと感じているので、その後はその経験を教訓として活かしている。

(会長) そのようにお声がけいただける方がいるから色々なつながりができてくると思う。私が高齢者地域強化支援センターから聞いたことがあるのは、要介護の方には様々な支援の人がついているが、要介護者が亡くなると支援者は一気に退いていき、残された家族はポツンととても孤独感があるらしい。一気に退かないよう、じわじわ退いていくように気をつけているとのことだった。支援というものはとても難しいものだ。

(委員) 介護する人がいる間はまだ良いが、介護している本人をケアする人が必要であると思う。

(委員) この場には守りたかった人を失った経験がある方は他にもいると思う。支援する立場にある人を支えることは本当に大事だと思うので、このような協議会や報告にあったネットワーク会議などが、同じ志を持った人と出会って辛い気持ちや体験を共有して、みんなで前に進んでいけるような機会になると良いと感じる。

(委員) この場だから先ほどの経験を話すことができた。やはり同じ志を持っていないとどうしても気持ちを共有しづらい面がある。経験を生かして、一緒に活動している人には困ったことがあれば相談するよう伝えている。

(委員) 経験を生かして周囲にお声がけいただいているということは、この地域の力になっていくと思う。

(委員) 私が普段心掛けているのは、一人きりになる前につながるようにすること。

進学、就職で遠方に行く・親御さんとの死別など変わり目は自殺につながりやすい傾向にあるため、環境変化の際には手厚くサポートしたいと考えている。また、医療機関の精神科などでも、このよ

うな団体があることを知らない人もいると思うので、できればもっと周知していただきたい。支援してくれる団体を紹介することができるし、可能であれば顔が見えると、このような場所でどんな人がやっているのか分かるというのは、実際のつながりを考えると良いのではないかと思う。

(委員) 環境の整備という観点においては、こういった支援団体は運営資金が大変だろうと思うので、行政は、施設を利用する時の支援などについて基準を決めたりすることは良いのではないかと思う。

(委員) どのようにしたらお金をかけずに地域の人たちと一緒に地域に必要なことをどれだけつくっていかれるかということから、このような活動が始まることが多いと思う。また、生きがいや役割を求めている方が地域の中にはたくさんいらっしゃるの、どれだけきっかけづくりができるかということが大事だと感じている。

(委員) 居場所とマッチングの話としては、認知症の親御さんを介護する方が同じような方が集う家族会に参加していたが、親御さんが入院・亡くなられた際にも、家族会の方の誘いに応じてその後も会に参加していることもある。他には、CSWがマッチングしたケースで、生活支援コーディネーターの手伝いをCSWと一緒に来て少しだけ参加していた方がいるが、その方は今ではそこで様々な役割を担って一人で手伝いに来られるようになっている。皆の話を聞いて、地域で何かをやっている方と出会える機会が他にもあるのではないかと思った。

(田中部長) 行政は、今まで割と高齢者とその家族といった形での支援になることが多かったが、コロナの影響も相まって若い方や単身世帯にも若年層の生きづらさを感じている方は非常に多く、そういった面で複合的な家族の課題を抱えている家庭が存在するということが見えてきた。それをどのようにひも解いて課題解決・改善にもっていくか、非常に難しいところではあるが、これまでの行政の組織も見直さなければならないところもあるし、このように支援団体と繋がることで行政だけではできないところをケアしていくことができるかと思っている。運営費の話が先ほどあったが、行政としてもどこまで行政が支援のメニューを作ったら良いか、また、既に民間の団体で支援されているところにお任せして区はそこに支援する方が良いのか、どこで切り分けるべきか、研究途上の段階。支援につながりやすいという意味でこれから考えていきたいと思っている。

(会長) 様々なことが見えてきている中で、これからどのようにしていくべきか考えたいと思っているし、社会福祉機構において補正予算で大規模なひきこもり支援事業の予算がついたので、支援を行っている民間団体にはたくさん応募して欲しい。

3 「令和3年度版 豊島区ひきこもり支援方針(案)について」【資料3-4】【資料3-5】

(事務局)

- ・令和3年7月にひきこもり専用相談ダイヤルの設置及び相談窓口を設置した。
- ・8月から「ひきこもり情報サイト」を起ち上げ、これまで協議会においてご意見をいただき、改善を加えながら取り組んでいる。

- ・令和3年度の取り組みのまとめと委員のみなさまからのご意見を来年度につなげることを目的に、「令和3年度版 豊島区ひきこもり支援方針」を作成することとした。
- ・資料3-4「【概要版】令和3年度版豊島区ひきこもり支援方針」に、「相談につながる仕組みを強化する」「断らない・強制しない支援を目指す」の2つの方針、またその方針から6つの支援の方向性を記載した。
- ・「ひきこもり実態調査の概要」について記載している。
- ・区における令和3年度の取り組みとして、(1)相談窓口の設置、(2)広報・周知、(3)専用ホームページ「ひきこもり情報サイト」、(4)研修・講習会、(5)オンライン相談、(6)福祉包括推進部会との連携、(7)ひきこもり支援協議会、(8)ひきこもりネットワーク会議と、豊島区として取り組んだ事項をそれぞれまとめて記載している。
- ・「窓口の相談状況」について記載した。今回掲載しているのは11月末時点の統計データだが、公表する際は最新データを更新して記載したいと考えている。
- ・前述の2つを支援の方針として、その方針に紐づく6つの支援の方向性を設定している。
- ・「支援の方向性」では6つの支援の方向性の内容を具体的に記載している。
- ・方針1「相談につながる仕組みづくり」について、取り組むべき事項として、前回の協議会でご指摘いただいた1-①「相談支援体制の強化」を記載した。
- ・今年度は生活困窮者自立支援制度の中で対応しているが、よりひきこもり支援に特化した専門的な体制を構築するための体制構築を目指し、現在、予算要求している。ひきこもりに特化した相談員が、相談からホームページ・SNSなどの情報発信までを一体的に行うことで、より、丁寧な支援を行うことが期待できる。
- ・1-②に「情報発信の強化」を記載している。情報発信の重要性は本協議会においても、多くのご意見をいただき、今年度取り組んだ。来年度も、支援を希望しながらも、相談につながらなかった方が、相談につながるよう、ご助言をいただければと思っている。
- ・1-③に「居場所の充実」を記載している。「居場所」については、区が直営で実施すべきか、既存の居場所を活用すべきかなど、当事者等が安心できる居場所の充実を目指し、引き続き議論いただきたい。
- ・1-④に「ネットワークの構築」を記載している。本協議会において、地域で活躍されている委員から「地域で支える仕組み作り」についてご意見をいただいた。ひきこもりネットワーク会議を連携の第一歩とし、地域で支える仕組みづくりを目指す。【資料3-5】(40ページ)
- ・2-①スーパーバイズ機能を記載している。【資料3-5】(41ページ)
- ・実際に相談内容を伺うと、単に「ひきこもり」についての相談ではなく、複合的で、複雑化した課題が混在している事例が一定数あった。課題を解決するには、専門分野間の支援を連携させる必要があるため、スーパーバイズ機能の導入について検討を進める。
- ・2-②には「支援員のスキル向上」を挙げた。次の相談につながるかどうかは、相談員の第一印象で決まる。こちらについては、当事者分野から出席いただいている委員からも重要性についてご意見いただいている。
- ・「講演会(案)」を記載している。こちらの(案)をもとに、来年度の講演会を企画したいと考えているところ。「こういう研修があって良いのではないか」という内容があれば、本日ご意見いただきたい。
- ・最後に参考資料として、東京都の提言、厚生労働省及び東京都の令和4年度概算要求を掲載している。

(会長) 主に38ページ以降に今後の方向性ということで整備されている。それでは「支援の方向性」につい

て、各委員の皆様にご意見・ご感想をいただきたい。

(委員)

- ・41 ページに記載されているスーパーバイズ機能についてももう少し具体的に説明して欲しい。(質問)
- ・コロナ禍でオンラインも使用するなどハイブリッドな会議体がだいぶ浸透してきたが、42 ページに記載の講演会についてもリアルだけでなく、オンラインも是非活用して欲しいと思う。(要望)

(会長) スーパーバイズ機能とは3つの機能がある。まず1つ目は支持的機能、ひとことで言えば支援者のための支援にあたる。2つ目が教育的機能、3つ目が管理的機能。これはスーパービジョンとって東京都の生活困窮者の自立相談窓口でも必ず教える内容。

(委員) 具体的な姿は事務局から示してもらえると良いのだが、関係者が集まって日頃困っている事例などを出して、それについて皆で検討し、経験のある方がスーパーバイザーとして入りながら、一緒に学んでいけるような、ケアのスキルを蓄積していけるようなものを私としてはイメージしている。

(会長) スーパービジョンの重要性とは、相談員が当たり前で普段通りの力を発揮できるようにすること、また様々な理由でそれができなくなってしまうことがあるが、それをなんとか改善できるようにすることが大事であると一般的には言われているが、豊島区ではどうか。

(事務局) 豊島区では資料3-5の20ページに記載のとおり、様々な事例を共有する場として福祉包括化推進部会というものがある。具体的には、保健福祉部、子ども家庭部、教育部、都市整備部の関係各課の係長を自立促進係長として兼務発令を出しており、通常の関係各課の連携の中で対応できない事例をこの部会で月に1度開催して共有している。この部会では、それぞれ事例を持ってきて、その方にあった支援がどのようなものか、今までやっていたもの以外にこれからどのようなことができるのかを皆で話し合いながら、新たな支援の方法を探っていく機会としている。しかし、それぞれの専門分野はいるものの、全体的に把握して支持できるような統括するような方が必要だと考えている。また、相談員の悩みなどを支える体制も必要であると感じている。具体的にどういったものが必要かという点については、委員の皆様からご意見をいただきながら来年度また検討を進めていきたい。

(委員) 福祉の現場ではスーパーバイザーとはよく出る言葉であるが、一般の人には分かりづらい言葉であるので、もっとかみ砕いて分かりやすくする必要があるだろう。

(会長) 行政に、20ページのような仕組みができてきているということは素晴らしいことだと思う。だからこそ、難しい課題もここに集まってくるので、スーパーバイザーの存在が必要になるということか。情報発信の強化についてはいかがか。

(委員) 様々な窓口で接触機会を設けると良い。最初のきっかけになるので、オンラインが良い方、電話が言い方、直接対面したい方、様々な人がいる。とにかくたくさんの方が良い。

- (会長) としまテレビだったり、区の広報だったり、皆の目に留まるように情報発信を工夫しているわけだが、いかがか。
- (委員) 若い方には SNS やインターネットの情報は届けやすいと思うが、中高年や高齢者にはそういった情報に自分から積極的にたどり着くことは難しく、むしろオーソドックスな区の広報を利用することが多いのではないか。ひきこもりは複合的な問題を含むため、当事者とその家族の双方向に情報が届くことが大事だと思う。
- (委員) 30 ページに記載されている内容について、家族からの相談が、ひきこもり相談窓口設置前は全体の 40%程度だったのに対して、窓口設置後は 70%を超えているが、きっかけはどのようなものにあると考えているか。
- (事務局) 10/1 に広報としま特別号を全戸配布した。広報に掲載した記事を読んだことがきっかけではないかと考えている。
- (委員) 39 ページに記載されている強化のポイントの部分で、「顔が見える相談窓口」というのは評価できる。いきなり就労支援となるとハードルが高く感じるが、支援員の顔写真や経歴が掲載されているだけで、相談者は相談しやすくなるのではないかと思う。
もうひとつ居場所の充実という点で、区が直営で実施すべきか、既存の居場所を活用すべきかあるが、既存の場所を有効活用して多様な居場所づくりをして欲しい。そして豊島区以外の方も利用しやすくなるようにしていけると良いのではないかと思う。
- (委員) 32 ページの相談件数の統計に区外からの問い合わせ、というものがある。実際には、あまりにも遠方だと援護が難しいが、現場の意見としては、広域支援ということで近隣の市区町村とやり取りできる仕組みができれば良いと思っている。
- (委員) 東京都のひきこもりサポートネットでは区市町村からの相談を受けられるような仕組みを強化していきたいと思っている。
- (委員) 支援者のスキル向上とあるが、ただそれぞれの病気を学ぶだけではなく、当事者が自発的に参加しなくなるようなイベントなどを実施するなど地域づくりも必要と考える。
- (委員) 地域福祉サポーターの役割として、地域で様々な活動をしているところにお誘いして活動者として活動してもらっている場面がある。年代も様々で、福祉や地域づくりに関心のある方なので色々な場面で活躍してもらいたい。
- (委員) 支援者のスキル向上に関して、知識をつけるという観点が強いが、どのような活動をしているかを支援者に知ってもらい、つなげる方の情報を伝えるような研修会を取り入れるとより良いと感じた。
- (田中部長) この支援方針も令和 3 年度版ということで、毎年ブラッシュアップしていきたいと思っている。

(委員) 情報発信について、住民の理解があって政策につながっていくということが大事なことなので、普及啓発に念頭をおいて取り組みをすることは良いことだと思う。

(委員) 当事者や家族が抱えている問題を彼らがどのように捉え、どのように言語化するかによって、ひきこもりの背景にある問題が見えてくると思う。一元的なものの方ではなく、様々な立場にたって支援の方針を組み立てられるようになることが、スキルの向上につながると考える。また、その中で客観的にみることができるとするスーパーバイズが入ることで支援者が自身の力を発揮しながら経験を積むこと、そしてその経験を全体で共有していけると良い。

(委員) ひきこもりの背景には複数のトラウマを抱えていると思うので、過去に受けた傷が現在の生きづらさにどのように影響しているのか、当事者も家族も理解してもらえるように、そして次の対応に結びつけていけるようにすることが今後必要などころではないかと思う。
また、豊島区の取り組みを他の自治体に広げていくことも大事だと思う。

(会長) 皆の意見を聞いて、ひきこもりというテーマを中核に置きつつそのテーマを広く捉えて、関係者だけでなく多くの人の理解を得ながら共に取り組んでいくことが改めて確認された。

4 その他：今後のスケジュール等について

(事務局) 以上をもって、第3回ひきこもり支援協議会を終了とする。

5 閉会